

UNHCR東京事務所
目沢寿美子

子どもたちに 明るい未来を! タイのミャンマー難民

難民キャンプへの道のり

「ガクン!」「ドスン!」車の揺れに伴い、車内に「ウッ!」と声^{こゑ}が漏れる。縦横、斜めに揺られての往復6時間。タイの北西部、メーホンソン県のメーサリアンという町と、メラウ難民キャンプとの間の山道だった。頭がガンガン窓枠に当たり痛い。前夜の雨が災いし、未舗装路はひどい悪路となっていた。すぐ脇に絶壁が迫る道も多く、車が転落した場合の脱出法を、頭の中で何度もシミュレーションする。車に酔う人は、フィールド職員には向かない、そして腕利きのドライバーの確保は絶対条件だと強く思った。

そうしているうちに、眼前の山の斜面に難民キャンプの家々が現れてきた。いや、キャンプと言うより、村人たちが生活する普通の集落に感じられた。このメラウ・キャンプの前に訪れたバントラクター難民キャンプでも、整然とした村、という印象を受けていた。いずれのキャンプもミャンマー国境から3kmほどしか離れていない。車から川の向こうに見えたミャンマー領は地雷原だという。

難民キャンプの人々

タイには現在、計9つのキャンプがある。難民の多くは1980年代から90年代にかけて、ミャンマーの政治的問題や民族問題によって祖国から逃げてきた。バントラクター・キャンプでは主にカレン族、メラウ・キャンプではカレン族が暮らしている。接

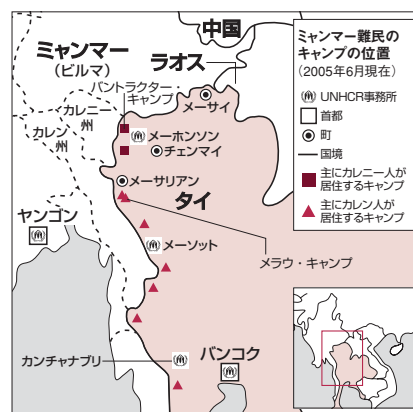
してみた印象は、カレン族は内気、カレン族は人なつこいというところだろうか。難民数は、前者が1万8000人強、後者が約1万7000人で、年間4〜5%ずつ増えているという。これらのキャンプを含め、計4つの難民キャンプをUNHCRメーホンソン事務所がカバーし、難民の登録やモニタリングなどを行っている。

キャンプには、学校や職業訓練所、クリニックなどの施設、そして難民の家々がある。建物は全て竹を編んで造られ、屋根は葉^ふ葺きがほとんどである。外から簡単に覗くことができる学校では、どの教室でも、子どもが夢中になって勉強している姿^{うかが}が窺えた。

印象に残っているのが、メラウ・キャンプの図書館で、UNHCRのパートナーでもある日本のNGO、社団法人シャンティ国際ボランティア会(SVA)が運営している注。折紙で色とりどりに装飾された室内。児童書は、ミャンマー語、カレン語に翻訳されている。ちょうど学校の授業^{たいぎょう}が終わった時分で、子どもたちが大挙して押し寄せ、本の取り合いが始まった。彼らは、本を読むという学びや娯楽に飢えている。この子どもたちの情操教育を日本のNGOが支えていることに誇らしさを覚えた。

子どもたちはどんなことを考えているのだろう。たとえば8歳のアシド君。両親を含めて8人家族、毎日この図書館に来るのが楽しみと言う。しかし「将来は何になりたいの?」と尋ねると、急に口ごもった。

「学校の先生やお医者さん?」と、通訳が気を利かせて彼の答えを促す。やっと彼は口を開いた。「人間になりたい」と。他の子どもも、「将来の夢」となると、しばらく考え込んで、「先生になりたい」「お医者さん」などと、通訳の促すままに答えるのだった。



教育の重要性と今後の課題

大人にもインタビューしようと、数件の家庭を訪問した。家には靴を脱いで入るので、ミシミシいう竹の感触が足に心地よい。ある人はパソコンを布で覆い隠すように持ち、部屋が雑多な物で溢れている一方、またある家は何もなく殺風景であった。皆、前述した理由で祖国から逃れようと、徒歩で、泳いで、あるいはボートに乗って国境を越えてきた。いつかはミャンマーに帰りたい、自分は教師だったのでまた教師をしたい、自分は農民なので、帰ったらまた農業をしたい、そんな希望^{ぞう}を持っている。もっとも、今家族揃って暮らせているので、祖国に帰れなくともよい、と言う人々もいた。

ところで「今、一番何が必要か?」という質問には、誰もが例外なく「教育」と答えた。いや、難民だけではなく。現地のUNHCRやNGOの職員、キャンプを管理するタイ内務省職員も、「教育」が優先課題だと言う。教育に関してはNGOの支援もあり、難民たちによって高等教育まで提供されている。しかし問題は、難民たちには「その先がない」ことなのだ。いくら優秀でも、大学に進学できず、キャンプ内での仕事は非常に限られている。だから子どもたちは将来の夢について語るのを躊躇^{ちゅう}していたのかもしれない。

一見、平穏そうに見えるキャンプだったが、難民であるが故、この難民たちに「自由はない」のだと改めて痛感させられた。子どもたちの将来は決して明るいとは言えない。そして、いつ彼らが祖国に帰還できるかもわからない。今後、私たちは教育も含めて、彼らに何ができるのか、真剣に考えていかねばならないと思った。



メラウ・キャンプでSVAが運営する図書館
UNHCR/S.Meza

注:詳細については、本誌23号の「難民キャンプに図書館を」を参照のこと。